

拝啓 今年も早や 10 月下旬、さわやかな気候の時期となりました。いつもエンカウンターお読みいただきありがとうございます。近所の公園では、今は木々が紅葉の準備を始めています。

今月は、「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」(6)をお送りします。今回の追想録の中には、佐生健光さん、柴田徳衛先生、広野かおるさんも登場されます。石館光子さんの告別式で柴田先生にお会いでき、しばらく東京都の局長時代に取り組みされたゴミ戦争の話などをいたしました。

10 月 3 日、石館光子さん(石館守三先生の奥様)が、102 歳で天に召され、告別式が小石川白山教会であり、参列いたしました。

石館基さんたち御家族は、告別式のお知らせを 180 通くらい郵便で出されましたが、200 人ほどの方のご出席者があり、白山教会の大きな礼拝堂がいっぱいになりました。白山教会は、石館守三先生の葬儀・告別式も行われた教会です。司式は、白山教会の細井牧師の司式で行われ、最初に讃美歌 510 番が故人愛唱歌として歌われました。「幻のかけを追いて」という母の祈りの歌ですが、「母は涙かわくまなく、祈ると知らずや」とあるところに、光子さんの家族・教会員に対する思いが込められているようで胸がいっぱいになりました。

説教は、清瀬弘毅牧師によって行われましたが、ゆっくりと、堂々たる説教で、石館ご夫妻の白山教会に対する貢献も的確に紹介され、感銘を受けました。また、お別れのことばが、戦後すぐの頃からお親しかった松本昭子さんによって話されました。便せんを淡々と読まれましたが、心のこもった素晴らしいことばでした。そのあと私も弔電をご披露する役目を頂きました。

最後に喪主の石館基さんが、挨拶をされました。石館さんは入院中の病院から抜けて出席し、話されましたが、光子夫人が、100 歳を過ぎてからも、守三先生と結婚できてよかった、ということをししばしば語られたという話に感銘を受けました。

式の後、隣のミス・ローラ・モーク・ホールで、ビュッフェスタイルで、コーヒー、紅茶とサンドウィッチ、クッキーのお茶の会が開かれ、集まられたそれぞれのグループの人が旧交をあたためておられました。このような形の直らいの会は初めてでしたが、実にいい会だと思いました。100 人以上の方が出席されたと思います。

帰りの電車の中で、「ご会葬御礼」の封筒を開けて、石館基さんの文章を読んで、更に驚きました。

会葬のお礼と光子さんの信仰歴を述べられた後、次のような文章が書かれていました。

「(母は)100 歳を超えましてもベッドで父との出会いの喜びを語るときは、

いつも幸せそうでした。天国で父との再会をどんなに喜んでいることでしょう。

私どもは、去る 5 日、家族によるお別れ会に際し、母の遠い昔の花嫁衣装、さくら模様の振袖を母の上にそっと掛けました。

旅ごろも まといて美し さくら花
若き日の母 よみがえりきて

私どもは、母の生涯を尊い遺産として大切に守ってまいりたいと存じております。これまでに賜りましたご厚誼に心から感謝申し上げます。

平成 23 年 10 月 22 日

喪主 石館 基
家族一同」

この二つ折りの手紙には、石館守三先生と光子先生の笑顔のすばらしい写真が載っております。写真付きの会葬御礼を見たのも初めてでした。

帰りの電車の中で、『小西芳之助先生余芳』という小西芳之助先生の追憶集を読んだのですが、光子夫人は、小西先生ご夫妻と、天国の前味を味わわれた箱根旅行の思い出を書いておられました。私も同書に、「われら地上に残された生涯を終えると小西先生の霊の教会に必ずや復帰する。今や、高円寺東教会は、天にある霊の教会になった。」と書いておりますが、40 年たって、天は充実、地は空虚、その思いはますます強くなりました。

本誌読者で、告別式に参列したくても、仕事の都合で参加できなかった方も何人かおられますので、詳しく書かせて頂きました。

9 月 26 日、学士館で、第 8 回新渡戸・南原賞授賞式が行なわれ、これもよい会でした。私は、南原先生のシンポジウムや、毎年の新渡戸・南原賞授賞式の事務方を務めていますが、小西先生が書かれている「平凡なことを、非凡に素晴らしくなせ」という言葉を心に刻んで、やって参りたいと思います。

10 月 13 - 15 日と、童謡の会の合宿で、御殿場の東山荘に 2 泊 3 日で出かけ、童謡・唱歌・讃美歌をたくさん歌い、英気を養ってまいりました。帰りに、足柄峠から、丸尾峠、湖尻へと箱根の外輪山のハイキングをしてきました。

高円寺の石館基さん宅の家庭集会は、11 月 13 日で終ることになりましたので、12 月 11 日から、第 2 日曜日と第 4 日曜日の 11 時から、佐生さんと私が交代で司会を務め、今井館（東横線都立大学駅から徒歩 10 分）の小会議室で、小西先生のテーブルを中心とした礼拝を続けることにしました。広く門戸を開放したいと思っておりますので、ご関心のありそうな方をご紹介ください。

さわやか秋がやって参りました。どうぞお身体御自愛下さい。

平成 23 年 10 月 24 日

山口周三

エンカウターの読者各位